

# 保育の今を問う<sup>(1)</sup>

松村 和子・金子 智栄子・アレン玉井光江・平山 許江\*

## Abstract

Responding to great changes in society and its demands, preschool education has been rapidly changing. Now is the time that we should question preschool education, analyze it, and search to establish what is the best education for preschoolers. As teachers working for a teacher training college, we strongly believe in the necessity of contacting preschool teachers to learn what actually happens at the site, and of sending out messages about preschool teaching.

This paper reports on what each researcher did in the first half of the year 2002.

The four members of this project discuss the current issues in preschool education for the public. The topics reflect the interests and specialities of each researcher. The report includes an account of the reaction from the public.

**Key Words** : current issues in preschool education, preschool teachers, reaction from the public

## I. はじめに

現在の保育の現場は、保育所、幼稚園を問わず、社会の著しい変化にさらされている。たと

---

What are the current issues regarding preschool education?

\* Kazuko Matsumura • Chieko Kaneko • Mitsue Allen-Tamai • Motoe Hirayama

(1)この研究は、文京学院大学共同研究助成を受けて行われている。

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,  
196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,  
Japan.

Accepted October 9, 2002. Published December 20, 2002.

えば、保育所の延長保育、休日保育、幼稚園の預かり保育、満3歳児入園などが矢継ぎ早やに要請され、導入されてきた。また、子育て支援の必要性も叫ばれ、在園児の保育で手一杯だといいいながら、地域の未就園の親子に園開放だけでもしなければと駆り立てられる。一方、園内の子どもとともにある保育を見ても、ここ10年の間に「環境による保育」や「チーム保育」など新しい言葉が導入されて、それが、以前の保育とどう異なり、もしくはどう発展したのか、検証されないまま日々忙しく動いているように見える。また、現代社会における企業や事業所の情報開示や第三者評価の波もまた保育界と無縁ではない。

私たちは、保育者養成の責務をもち、このように変化する保育の世界に若い保育者を送り出す立場である。保育心理専攻の4名の教員はこの急激に変化する保育の現場において、なにが課題になっているのかを探求する場が必要であると考え、保育実践研究会を設けることとした。さらに、文京女子短期大学、文京女子大学の卒業生を含む、保育の実践者、研究者との公開討論会を企画し、共同研究者それぞれの専門性を生かした問題提起とそれに伴う協議を行い、現場に即した研究を進めている。この公開討論会には、養成校としてのリカレント教育の可能性を探る目的もある。保育者として成長し続けるために、養成校時代の教育とともに現職にある卒業生をどう支えていくか、養成校としての新しい役割を構築する端緒としたい。

## II. 研究の目的

変化する現代における保育の現場での課題を明らかにし、保育者養成校としてのリカレント教育のあり方について提言を行う。

## III. 研究の方法

今回の研究は、次の二つの方法、すなわち学内の共同研究と、学外に開かれた討論会によって行われた。

### (1) 4人の共同研究者による保育実践研究

4人の共同研究者がそれぞれ保育の現状に関して自分の専門領域からの課題を持ち寄り、ブレインストーミングし、公開討論会での統一テーマを決める。また、公開討論会の後に、協議を受けてさらに個人での研究を深め、次回の統一テーマに反映させる。

### (2) 公開討論会

共同研究者が各々の視点から課題とすることをシンポジウム形式で発表し、参加者と協議する。

日時：2002年度前期は、4月27日、5月11日、6月8日

各土曜日の午後1時半から4時半まで

場所：文京学院大学本郷キャンパス

対象：現職の保育者（幼稚園，保育所），保育関係の学生，院生，保育者養成大学の教員，園長設置者，および保育雑誌出版関係者等  
36名（うち幼稚園教員22名，保育所保育士3名）

この学内研究会と公開討論会とで成立する研究システム自体に保育の現場と連動し，双方向で研究を進めようとする新しい研究方法の試行を内包している。よって，公開討論会の時間や場所の設定については，現職の保育者が参加しやすいことを条件とした。

なお参考までに，2002年度後期は，9月28日，11月2日，12月14日に予定している。

#### IV. 研究の経過

ここでは，公開討論会における各研究者の発表を要約して述べる。

##### 1. 第1回 「保育者の専門性を考える」

###### (1) 「保育の専門性とは」(平山許江)

###### a. 保育者は「専門職」である

保育者は，「専門職」である。なにを身につけることが専門なのであろうか。保育技術なのか，得意なものがあるほうがいいのか，素直さや体力といったものだろうか。現場の要請に 대응ということも大事であるが，それだけでよいのだろうか。理想の保育と理想の保育者像とはどうあるべきなのであろうか。

###### b. 養成校の役割

養成する立場としたら，なにを育てることが専門家を育てることになるのだろうか。現場と養成校の間には互いの要求に沿うという関係があるが，そのお互いの要求は果たして本当に合っているだろうか。ある情報が商業で大量に流されるとそれが本当になってしまうという危険性があるが，世の中の今ある保育や保育者像のさまざまな情報は，そのような心配はないのだろうか。社会に流布している保育や保育者像にまつわる情報をもう一度検討して，その価値を問うてみたい。そして，この公開討論会で保育者像のレベルを上げるための情報発信をしたいと考えている。

###### (2) 幼児英語教育の立場から (アレン玉井光江)

###### a. 園内保育における英語活動の実情

園内保育における英語活動の変化をアレン玉井が担当する文京幼稚園の場合について説明する。通常の保育室から英語の専用室に場所を移したことにより，子どもたちが「あ，英語の時

間だ」という認識を持つことはよいことだが、英語担当教員からは、通常の保育活動が見えにくくなる欠点があった。また、教員が外国人の場合は、クラス担任とのコミュニケーションが取りにくい点があり、日本人教員の場合は、日常の保育との連動性が強まる。それをさらに高めるために英語教員とクラス担任教員のチームティーチング体制をとり、担任との連絡方法についてさまざまな工夫をした。

#### b. 幼児・児童英語教育の変遷

幼児・児童を対象とした教授法も過去20年の間に大きく変わり、現在では、児童中心主義、合科的アプローチ・トピック中心、意味のある本物の題材で児童同士の自然なかかわりの中で教えようとしている。たとえば、“This is a pen.”と教師主導で教えるという方法から、「わー、きれいな赤い花が咲いている！」という文章から、“red”という単語が子どもたちの生活に意味のある言葉として生きていくというように考えられている。

### (3) 幼稚園現場から（松村和子）

#### a. 専門性についての一提案——保育者の立場、役割の中での専門性

専門性について考えるときに、その保育者がどんな立場や役割を負っているかで、少しずつ違ってくるのではないだろうか。たとえば、新人のとき、中堅と呼ばれるとき、主任になったとき、また園長など園の運営・経営責任がある場合など、求められる専門性に違いが出てくると考え、より細かく吟味する必要があると思われる。

#### b. 保育の説明責任（accountability）——園全体としての保育の説明とそのプロセス

幼稚園設置基準が平成14年3月28日に7年ぶりに改定され、<sup>(2)</sup>保育の説明責任について「自己点検評価及びその結果の公表に努めるとともに、積極的な情報提供を行う」とされた。このことは、保育所の自己点検や第三者評価ともあいまって、社会の情報公開の流れが、保育界にも及んでいることを示している。幼稚園におけるこの説明責任はどのように行われるのだろうか。入園説明会などで保育方針を明らかにすることがほとんどであると思われるが、今後の課題としては、その結果についてどう開示するかが問われている。松村の関係する園での2泊3日の冬山旅行（卒園前の年長組の子どもと保育者のみで実施）について保護者からもっと詳しい説明が求められたことを事例とし、園としては説明責任を果たしたつもりであっても保護者のほうは、満足していない場合もあることを明らかにした。

〈注2〉幼稚園設置基準の抜粋（平成14年3月28日改定）

幼稚園が幼児の状況や地域の保育ニーズなどに応じた特色ある主体的な教育活動を展開し、地域住民の信頼に応え、地域に開かれた幼稚園として運営できるよう、自己点検評価及びその結果の公表に努めるとともに、積極的な情報提供を行う。

なお、実施に際しては、各園が実態に応じて、教育目標、教育内容、運営方針、研修の状況、施設設備など幼稚園運営にかかる点検評価項目を具体的に設定して、客観的に点検評価すること、またその結果を広く周知を図る方法で情報提供することが望ましい。

(4) 保育所現場から (金子智栄子)

a. 平成11年保育所保育指針改定の主な概要

平成11年に改定された保育所保育指針では、年齢区分ごとに「保育士の姿勢とかかわりの視点」が示され子どもの自我の発達に対する援助が強調されている。また、保育所の現代的な機能として地域の子育て家庭への支援、乳幼児突然死症候群やアトピー性皮膚炎や虐待への対応などが盛り込まれている。また、保育士の国家資格化にも伴い、専門性の向上に關しての努力が求められている。

b. 保育士の国家資格化 (平成13年11月30日公布)

平成13年11月30日に公布された保育士の国家資格化により、守秘義務や登録・試験に關する規定が整備された。

**2. 第2回 「チームティーチングについて」**

(1) 専門性とは (平山許江)

a. 現在にふさわしい教育理念をもつ

専門性とは現在にふさわしい教育理念を持つ必要がある。ゆるぎない保育理念を持つことが大事だが時代の要請にも敏感でなければならない。先回の発表で保育所保育指針が改定になり「～歳で～～が出来る」ではなく自我の発達や愛着の形成などを入れたことや英語の学習方法が「全体 (を捉えてから) 部分 (の学習へ)」へと変わっていったことなど、現代の研究の知見を取り入れていかなければならない。そのためには、継続的な研修が必要であって、職についてから研鑽を積む過程で専門職となりうるのであろう。

b. 社会に対する責任と自覚をもつ (accountability)

保護者や地域とともにあること、そしてそれがサポートするというより、子どもの育ちとともに担うパートナーとしてあることの自覚をもつ必要があるであろう。その際、保育所所長・保育士のための「自己点検表」があるので、参考にできるのではないだろうか (資料として配布した)。

c. 課題——保育内容の検討、保育の構造化

今後の課題として、保育内容の検討と子どもとともにいる時間以外の研修や記録の時間などをどのように構造化するか、園の保育とその他園外の教育とどう連動させるかなどを考えたい。

(2) チーム保育について (松村和子)

a. チームティーチングの歴史と概念

1960年代にアメリカで始まったとされるチームティーチングの歴史と概念を説明。

b. 他の複数教師のいる学習法との違い

ほかにも教師が複数いるような教育場面 (たとえばグループ学習、複数担任、オープンスクール) とチームティーチングの違いを述べる。

c. チーム保育—そのさまざまな保育場面での取り組みの検討

保育では、以前から意識せずともチーム保育をしていた場面もある。たとえば、複数担任制、担任を持たないフリーの保育者を置く、体育や英語などの課外の講師が入るとき、障害を持つ子どもに加配の保育者をつけるなどである。それは、どんなチームだったのだろうか。

d. チーム保育の長所、短所と自分の園でできるチーム保育とは？

チーム保育の長所と短所を整理して、自分の園の実情にあったチームのあり方を考えたいと提言した。

(3) 外部講師と担任教師の TT（チームティーチング）について（アレン玉井光江）

a. 英語教育におけるチームティーチングからの示唆

——日本人英語教員（JET）と外国人教員（ALT）との TT

1987年に通産省、外務省、文部省が一緒になって開始された「語学指導等を行う外国青年招致事業」により日本人英語教員と英語の母語話者との TT が多く見られるようになって来た。しかし、外国人教師は、歩くテープレコーダーではなく、TT としての役割をどのように果たすかが、課題である。

b. 文京幼稚園での英語活動における TT の試み

文京幼稚園では、昭和41年から外国人教師による英語活動を行っており、10年前からアレン玉井が担当している。幼稚園の生活全体に関係しながら、英語習得が目的ではなく、多文化理解などの複眼的な思考を育てたいと考えている。クラス担任との TT で、クラス担任が楽しむことが子どもたちの意欲や集中力を高めることにつながるように感じる。英語教師は園の行事に沿ったり、クラス担任は英語を日常生活に取り入れたりするなど相互に高めあうことが出来る。実際に文京幼稚園で使っている英語活動の教材を提示し、そこから派生した子どもたちの絵の色彩感覚の違いなどを披露した。

c. 小学校教育での「総合的な学習の時間における英語活動」への示唆

今後公立小学校で正式に英語が導入されるときに、何らかの示唆が出来るように考えている。

(4) スーパーバイザーと研修プロジェクトについて（金子智栄子）

a. 富山県小杉町保育連絡協議会の実践（平成7年～平成10年3月）

実際に金子が富山県小杉町で公私立の保育所の保育士たちと行った研修会で、スーパーバイザーを務めたときのことを報告した。

b. スーパーバイザー（監督者・管理者）の役割

スーパーバイザーの役割や現場の保育士が研究を進めるに当たっての問題点などを整理して、専門性を高めるために必要なことを提案した。

c. プロジェクトを終了して主に学んだこと

研修会で事例研究を行う際に、他の人の保育実践について意見を述べることにとまどいや躊躇などについて、意見を言うことが事例提供者への非難・攻撃になることを恐れるのかもしれないという点が指摘された。お互いの実践を批判ではなく高めあうために話し合う工夫が必

要だと感じられる。また、研究発表や公開保育も研究への意識を高めていく上で大事であることが話された。

### 3. 第3回 「保育の専門性とチーム保育についての公開協議」

今回は、参加者全員が(1)専門性について、(2)チーム保育についてのどちらかの点について、自分の意見を発表し、その後全員で協議する形とし、4人の共同研究者は、適宜協議に参加した。参加者は、発表する意見によって、二箇所に分かれて着席し、かつ次のような発表形式をとることによって、参加者の意識を明確にし、発言を具体的なものとするよう工夫した。

#### (1) 専門性について

私は「保育者に求められる専門性とは～と考えます」

①それぞれ自分の立場から、②相手(対象)にもとめる専門性、あるいは③自分自身に求める専門性について述べる。(発表構造 ①-② または ①-③)

#### (2) チーム保育について

私は「チーム保育を成功させるための秘策は～と考えます」

①それぞれ自分の立場から、②具体的な方法を、③成功や失敗の結果を理由としてあげながら述べる。(発表構造 ①-②-③ または ①-③-②)

## V. 研究の結果

3回の公開討論会とその前後に開かれる4人の共同研究者による学内での保育実践研究会を通して、明らかになったことを3つの視点から考察する。

#### (1) 現場と保育者養成校との双方向の研究方法について

今回の公開討論会には、保育の現場にかかわるさまざまな立場の人が参加しており、そのことにより、研究協議に重層的な関係が生まれたと思われる。まず、中心には現職の幼稚園教諭(公立、私立とも)、保育所保育士(公立、私立とも)が位置し、各園の実情を自分の体験を通して話す。参加者には、保育の経験年数によって、また園によってこれほど考え方が違うのかという驚きがあり、視野が広まるという利点がある。しかし、公立と私立で、また園の保育方針によってさまざまな考え方があり、養成校と現場との双方向の研究といってもひとつのことを普遍化して捉えることは出来ないと感じられる。次に、現職であり、同時に園長、副園長など運営・経営責任を持つ人も参加していることから、保育者一人の課題から園全体の保育方針にかかわる課題にも目が向けられ、若い保育者にとっては園全体を見通しての自分の役割が捉えられる契機となる。さらに他の保育者養成大学の教員や学生、院生も参加しており、討議内容について白熱した議論が交わされる。このことは、現職の保育者にとっても保育理論はひとつではなく、さまざまな考え方があり、またその考え方をつき合わせる(関わらせる)こと

が、理論を向上させることにつながることを身をもって体験することになる。これは、自園での職員会議などの活性化に役立つのではないかと思われる。最後に保育雑誌出版関係者など保育にかかわるが他業種である参加者の立場から見た「現場としての保育界」についての率直な意見は、時に外界とは離れて現場の中での見方に終始しがちなわれわれに他の業界との比較対応において保育界全体の課題を浮かび上がらせてくれる。このような保育に関わる役割や立場の相違が、それぞれの討議内容において多彩な意見を産み、相互に学びあい、重層的な循環作用をもたらすといえよう。

ここで課題になるのは、リカレント教育における保育者養成校としての役割である。この研究では、リカレント教育の方向性を探ることが目的のひとつとなっており、私たち共同研究者は、この公開討論会の重層的な関係の中に大学教員としての課題意識を持って参加し、参加者から学び、かつ参加者にも有意義な討論となるよう準備を重ねて、現場との双方向の研修になるように運営してきた。各地で、保育技術の研修会や教育課程や保育内容に関しての研修および、園内での事例研究などがおこなわれているが、今回のような保育における現代的な課題について、単に講義を聞くのではなく、役割や立場の違う参加者が自分の意見を述べ合う研修は大きな特色があったと考えられ、リカレント教育の内容という点では、それぞれの参加者に上記のように成果をもたらしたといえよう。この3回の公開討論会の直接のテーマとして、リカレント教育の方法論をとりあげたのではなく、この討論会の運営自体が新しいリカレント教育の方向を探る試行であった。参加者自身が語る研修という特色を生かしたときに、参加者にキャリアや立場の違いというさまざまな層があることから、討議のテーマ設定や発言しやすい雰囲気作り、会の期日の設定などに配慮がもためられる。各回とも参加者の協議は、自分の体験に基づき、活発に進められたことが大きな特色だが、それは、現職の保育者の多くが、文京学園の出身であるか、または関係者であり、同窓生として忌憚なく意見を言える雰囲気があったからだと思われる。このような特色を生かした保育者が自ら語るリカレント教育を志向するための方法論についてもさらに探求することが次の課題である。

## (2) 保育の専門性について

まず、3回を通して協議された内容には、従来の意味での保育の専門性（保育者としての子どもの見方、保育計画の展開、保護者への対応など）という観点と、他の業種と並列に並べたときの保育界の専門性という観点（アカウントビリティ、保育士の国家資格化）の2点があったが、参加者の発言は、前者に偏るように思われた。たとえば、保育内の英語活動や他の保育内容についての是非や保育者の意図をどう展開するかなどについて活発に意見が交わされた。また保育の民間委託に伴い無資格のパートが参入するなどにおいて、専門性が揺るがされるというような捉え方も見受けられた。しかし、後者については、たとえば、保育所の第三者評価についてもまだ導入が計画段階であり、実際に自分の周りでその評価を受けた経験がないので、参加者には遠く感じられたようで協議の柱にはなりにくく、発表者(共同研究者)の意見を聞くというところにとどまった。しかし、このような保育界全体を見渡しての、また他の業種との



対応において問われる問題については、養成校として情報公開や注意の喚起が責務であり、現場の保育者にいち早く届けて、社会と連動する必要があると思われる。

### (3) チーム保育について

この点については、どの参加者も自分の経験があり、大いに語る事が出来た。中には、保育者間の人間関係について話しながら思わず涙ぐむなど、自分の園ではいけないことも同窓生という点で安心して打ち明け、それぞれ他の参加者の体験を聞くなどして、解決策を探る契機と出来たのではないだろうか。それぞれの園でのチーム保育のあり方は、さまざまであり、中には一クラス30人を一人担任であるが、外で遊ぶときはみな一緒に、全員の教師が全園児を見る意識だからチームだと定義するなど、チーム保育と言ったときの意味するものが大変に多様であることが感じられた。また、チーム(たとえば複数担任)であっても、どうしてもキャリアの差や性格、また活動の得意不得意で、お互いに意見が言える言えないという例や、園長はチーム保育をしたいのだけれども、保育者側にどうしても自分の保育をしたいという意識があり、うまくいかなかったという例が出るなど、チーム保育に取り組んでいるところにもそれぞれの課題があることが明らかになった。しかし、一部には、昔ながらの一学級一担任の意識を持ち続けているところもあり、他の業種から見ると保育界は保守的であるという指摘があった。

今後は、そもそもチーム保育は何のためにするのかを考える必要がある。そして、チーム保育を成立させる必要条件は何か、あるいは逆にチーム保育を難しくするものは何かについて、各自の立場から忌憚ない意見を交換したいと考えている。

以上、2002年度前期の研究活動について報告したが、これを土台にして、後期の学内研究および、公開討論会での協議を深めていきたいと考えている。